

韋応物の「驪山行」「温泉行」詩について

竹村，則行

<https://doi.org/10.15017/2332605>

出版情報：文學研究. 86, pp.23-45, 1989-02-28. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

韋応物の「驪山行」「温泉行」詩について

竹 村 則 行

この小論は、中唐の詩人として知られる韋応物が玄宗の驪山宮行幸に扈從した経験を回想した「驪山行」「温泉行」詩の制作年代の比定を試み、あわせて、そこに描かれた韋応物の稀有な盛唐体験の意味するものについて考察したものである。

小論において、私が特に韋応物のこの二篇の詩を取りあげる理由は二つある。その一は、これらの詩に描写された、若冠十五歳にして玄宗の驪山宮行幸に扈從し、続く安祿山の乱によって失職流浪するという韋応物の若年の経験が、その後の詩人としての韋応物の成長発展に果たした役割について、私なりに検証してみたいことである。そしてその二は、驪山華清宮をめぐる所謂楊貴妃伝説の発生と展開史上において、韋応物の「驪山行」「温泉行」詩が占める位置付けを、文学史的に少しく明らかにしておきたいことである。

二

韋応物が玄宗の驪山宮行幸に扈從した経験について言及した詩は、「驪山行」「温泉行」の他に、およそ次の三首を挙げ得る。

。燕李録事（「韋蘇州集」卷一）

韋応物の「驪山行」「温泉行」詩について（竹村）

。酬鄭戸曹驪山感懷（『韋蘇州集』卷五）

。逢楊開府（『韋蘇州集』卷五）

※（以下、韋応物詩の引用は四部備要本を底本とし、唐五十家詩集本、四部叢刊本、全唐詩本、国学基本叢書本、須溪先生校和刻本等の諸本を随時參校することにする。）

燕李録事（抄）

李録事に燕す（抄）

與君十五侍皇閨

君と 十五にして 皇閨に侍り

曉拂爐煙上赤墀

曉に炉煙を払い 赤墀に上る

花開漢苑經過處

花開く漢苑に 經過する處

雪下驪山沐浴時

雪ふ下る驪山に 沐浴する時

ここで韋応物は、李録事と宴会した折に、曾て「十五」の時に玄宗と共に仕えた事を回顧する。ここにいる韋応物「十五」歳とは、羅聯添氏「韋応物年譜」⁽¹⁾によれば、天宝十載（七五一年）を指す。そして、『旧唐書』・『新唐書』・『資治通鑑』等の記録を閲すれば、玄宗の驪山行幸は例年の恒例であったが、特に天宝十載から十四載までは、毎年「冬十月」になると、玄宗は欠かさず驪山華清宮に行幸している。その一隊は、宋・劉斧「青瑣高議」所収「驪山記」中に登場する田翁の記憶するところによれば、「從駕の侍衛は祇まに五六千人」という多勢を引き連れた仰々しい華やかな行幸であった。そしてその一隊中には、玄宗のほかに、当然のことながら楊貴妃の姿があり、更には、隊の先触れとして駆ける少年韋応物の姿があったのである。

酬鄭戸曹驪山感懷（抄）

鄭戸曹の驪山感懷に酬ゆ（抄）

蒼山何鬱盤

蒼山 何ぞ鬱盤たる

飛閣凌上清

飛閣 上清を凌ぐ

先帝昔好道

先帝 昔 道を好み

下元朝百靈

下元に百靈に朝す

白雲已蕭條

白雲 已に蕭條として

麋鹿但縱橫

麋鹿 但だ縱横す

泉水今尚暖

泉水 今尚お暖かく

舊林亦青青

旧林 亦た青青たり

我念綺繡歲

我念ふ 綺繡の歳

扈從當太平

扈從して 太平に當る

小臣職前驅

小臣 前驅するを職とし

馳道出灑亭

馳道 灑亭より出づ

翻翻日月旗

翻翻たり 日月の旗

殷殷鞞鼓聲

殷殷たり 鞞鼓の聲

萬馬自騰驤

萬馬 自ら騰驤り

八駿按轡行

八駿 轡を按じて行く

日出煙嶠綠

日出でて 嶠の緑は煙り

氛氳麗層甍

氛氳として 層れる甍は麗はし

登臨起遐想

登臨して 遐想起り

沐浴懽聖情

沐浴して 聖情懽ぶ

朝燕詠無事

朝に燕して 無事を詠ひ

時豊賀國禎

時豊かにして 國禎を賀す

日和絃管音

日和して 絃管音ひびき

下使萬室聽

下使 万室しんが聴う

海内溱朝貢

海内 朝貢あつ溱まり

賢愚共歡榮

賢愚 歡榮を共にす

合沓車馬喧

合沓して 車馬喧しく

西聞長安城

西のかた 長安城に聞ゆ

ここで韋応物は、その「綺襦の年」に、玄宗の驪山宮行幸に「扈從」して、「馳道」を「前驅」した経験について回顧する。その当時、行幸の日月の旗が翻翻とひるがえり、太鼓の音が殷殷と響く。一隊の軍馬は勢いよく馳せ、整然と行進する。時世は天下太平をよるこび、海内の貢物が華清宮に届けられ、その雑踏のにぎやかさは西方長安にまで聞えるほどであった。

韋応物がここに言う「綺襦の年」とは、先に挙げた「燕李録事」詩の「十五」歳に相当するものであろう。また「綺あやぬの襦とうき」とは、次詩に述べる貴族子弟の遊蕩ぶりにも直結する語である。

いずれにしても、この「酬鄭戸曹驪山感懷」詩からは、玄宗の驪山宮行幸に扈從して意気軒昂な韋応物少年の霸氣と共に、絶頂にある盛唐天宝期の天下太平ぶりが如実に伝わって来る。

逢楊開府(抄)

楊開府に逢うう(抄)

少事武皇帝

少わかくして武皇帝に事へ

無頼恃恩私

無頼 恩私を恃たのむ

身作里中横

身は里中の横と作り

家藏亡命兒

家に亡命の児を蔵す

朝持樽蒲局

朝に樽蒲の局を持し

暮竊東鄰姫

暮に東隣の姫を竊む

司隸不敢捕

司隸 敢て捕へず

立在白玉墀

立ちて白玉の墀に在り

驪山風雪夜

驪山の風雪の夜

長楊羽獵時

長楊に羽獵する時

一字都不識

一字も都て識らず

飲酒肆頑癡

飲酒 頑痴を肆にす

武皇升仙去

武皇 升仙して去りてのち

憔悴被人欺

憔悴して 人に欺らる

讀書事已晚

書を読むも 事 已に晩く

把筆學題詩

筆を把りて 題詩を学ぶ

ここには、貴族子弟の「恩私を恃」んで賭け事や女色に耽り、放蕩三昧をする少年韋応物のわがままぶりが露わである。特権階級であるが故に、「東鄰」の美女をかどわかしても、司直は韋応物を逮捕することができない。第九句に「驪山風雪夜」とあるのが、韋応物が玄宗の侍衛として驪山宮行幸に扈從した事を指す。しかし、その放縱さも玄宗という時の最高権力の庇護があつてのこと。安祿山の乱を経て「武皇」(玄宗)が「升仙」して後は、最大のパトロンを失つて「憔悴」し意気消沈した韋応物は、曾ての威勢はどこへやら、他人にも容易に「欺」られる「綺

襦」の子弟と成り果てるのである。韋応物の場合と必ずしも同じではないが、安祿山の乱の渦中にあつて路隅に泣く王孫の哀話は、杜甫の「哀王孫」詩に詩史としていっそう詳しい。

こうして、安祿山の乱という政治時変により、貴族子弟の特権が消滅し、否応なく自分一人の力で生きなければならぬ社会の現実^①に直面した韋応物であったが、時已に学問読書を以てあらためて文官として身を立てるには遅く、「筆を把つて題詩を学ぶ」ことから新たな人生を踏み出し始めるのであった。第十六句「讀書事已晚」とは、安祿山乱のその年、韋応物が「十有五にして学に志す」(論語・為政) 年齢(十五歳)を既に過ぎていたことを言うであろう。羅氏の年譜では、この年韋応物は已に二十歳である。後に中唐の詩壇に登場する詩人韋応物の実質的な出発は、実にこの時に始まるのである。

三

韋応物のこの侍衛出仕は官蔭によるものである。即ち、韋応物は、曾祖父の待價(武后文昌右相^② 從二品)、祖父の令儀(梁州都督^③ 從三品)、父の鑾(少監^④ 從四品下)等の功績ある先祖の恩恵により、特に「氏素姓の明らかな高級官僚を祖ないし父にもつ官僚貴族の中から選抜された栄あるエリート」^⑤として、玄宗の驪山宮行幸の侍衛に補せられたものである。

特に、それらの所謂先祖の「七光り」を受けて出仕した子弟の中に、素行の些か芳しからぬ者のあつた事は、韋応物自身が、この「逢楊開府」詩中でいみじくも回顧している。即ち、「無頼 恩私を恃む」といい、村中の横者^{なすもの}となつて、家に「亡命兒」を隠蔽し、「樽蒲局」(賭け事)にふけり、「東鄰姫」をかどわかしても、司直は手も出せなかつた事がそうである。この詩表現は、韋応物が幾多の時間を経て回想したものであるから、やや極端な美化と誇張があるかも知れぬが、それにしても、本人が曾ての自身の体験を記したものであり、所謂良家の「お坊ちゃん」

の放縦ぶりを示すものとしては可成りの真実を伝えているであろう。

そして、盛唐に生を受けた韋応物が父祖の恩恵によって玄宗の宿衛として出仕し、且つ一方でこのような放埒なふるまいが多かったことは、韋応物自身においては楽しかるべき歡樂の日々ではあつたろうが、やがては抹殺し、超克するべき少年時代の残影としての意味を持つ。則ち、続く安祿山の乱によりそのポストを失つた韋応物は、当然の事ながら深刻な「憔悴」の後、やがて読書と詩作に没頭することによって、誰の庇護にも頼ること無く、自らの力で進路を開拓してゆくことを余儀なくされるのである。

この時、時代は既に中唐に移行しているが、まことに中唐こそは、寒門出身に属する多くの詩人が、六朝以来根強く続く門閥貴族制にのみ自己の出世を拠ること無く、主として自身の努力による進路開拓を要請された時代でもあつた。このことは、中唐の詩人元稹、白居易等の例を出すまでもない。

このように考えてくれば、中唐の詩人韋応物が、盛唐の少年時代に官蔭によって玄宗の驪山宮行幸に扈従し、そしてそれが安祿山の乱を経て失職流浪するという経験を持ったことは、本人には或いは堪え難い辛酸事であつただろうが、盛唐から中唐へ移行する歴史過程においては、蓋し起り得べき甚だ象徴的な出来事であつたと言える。

四

韋応物の「驪山行」詩は以下の通りである。いま、その詩内容と押韻により、四小段落に分けて見てゆくことにする。

君不見開元至化垂衣裳

君見ずや 開元は至化にして 衣裳垂れ

厭坐明堂朝萬方

明堂に坐して 万方朝するに厭く

訪道靈山降聖祖

道を靈山に訪ひ 聖祖降り

沐浴華池集百祥

華池に沐浴して 百祥集まる

千乘萬騎被原野

千乘 万騎 原野を被おほひ

雲霞草木相輝光

雲霞 草木 相輝かがや光く

禁仗圍山曉霜切

禁仗 山を囲み 曉霜あけ切きし

離宮積翠夜漏長

離宮 翠を積み 夜漏長し

玉階寂歷朝無事

玉階は寂歴として 朝に事無く

碧樹葳蕤寒更芳

碧樹は葳蕤うるはしく 寒ふゆに更はなに芳はなさく

三清小鳥傳仙語

三清の小鳥 仙語を伝え

九華真人奉瓊漿

九華の真人 瓊漿を奉ぐ

ここには、「衣裳垂たれて」ひとりもでに天下あが良よく治ちまった開元（天宝）時代、玄宗が驪山華清宮に行幸して、「聖祖」即ち道君皇帝老子に拝礼する様子が、一侍衛たる韋応物の眼を通して描かれる。

この詩の第一句に「開元」とあるのは、作者の過去回想の表現と考えられ、従ってこの詩がそれ以後に詠まれたことを示す。第三・四句「訪道靈山降聖祖 沐浴華池集百祥」とは、玄宗が毎年、恒例の如く驪山の華清宮に行幸し、祖宗として老子を崇拜し、華清池に沐浴した事の表現である。そして、この時、楊貴妃もまた一方の主役として一隊の中にあつた。第五句「千乘萬騎被原野」―第十二句「九華真人奉瓊漿」は、その驪山宮行幸の様子を、韋応物の職務である宿衛の視点を通して活写した表現である。特に第七・八句「禁仗山を囲み 曉霜切し」「離宮翠を積み 夜漏長し」とは、冬十月、厳寒の驪山宮の警衛に当たる「禁仗」兵たる韋応物の実感がこもった切実な表現として、読者の心に強く訴える感動性を持っている。

このように、ここに引用する韋応物の一連の詩における驪山宮の描写が、曾て一宿衛としての任に当たった韋応

物の眼に映じた現実の映像であることは、当然のことながら、あらためて注目しておきたい視点である。

下元味爽漏恒秩 下元の味爽 漏 恒秩のごとく

登山朝禮玄元室 山に登り 朝に礼す 玄元の室

翠華稍隱天半雲 翠華 稍や隠る 天半の雲

丹閣先明海中日 丹閣 先づ明く 海中の日

羽旗旄節憩瑤臺 羽旗 旄節 瑤台に憩ひ

清絲妙管從空來 清絲 妙管 空より来る

萬井九衢皆仰望 萬井 九衢 皆仰望し

彩雲白鶴方徘徊 彩雲 白鶴 方び徘徊す

馮高覽古嗟寰宇 高きに馮よって 古を覽み 寰宇を嗟す

造化茫茫思悠哉 造化茫茫として 思ひ悠なる哉

秦川八水長繚繞 秦川 八水 長く繚繞たり

漢氏五陵空崔嵬 漢氏の五陵 空しく崔嵬たり

ここでは、前段部分に続いて、毎年恒例となった玄宗の「下元」節（十月十五日）における驪山宮「玄元室」（朝玄閣のことか）「朝禮」の様子を、やはり一宿衛たる韋応物の眼を通して述べる。引用部分の第三・四句「翠華稍や隠る天半の雲」「丹閣先づ明く海中の日」とは、驪山宮の夜半の警護について、そのまま夜明けを迎えた一宿衛たる韋応物から見た実景であったのだろう。とりわけ「丹閣先明海中日」とは、朝ぼらけの大雲海の中から一条の朝日が丹閣をくつきりと照し出して一層鮮やかな表現である。（この部分、四部叢刊本はじめ諸本は「丹閣光明海中日」と作るが、「唐五十家詩集」本に影印する明銅活字本では「丹閣先明海中日」とある。対句上からも意味上からも、この表現の方が一層ふさわし

く思われる。第一・二句「下元味爽漏恒秩 登山朝禮玄元室」とは、玄宗の驪山宮滞在中の恒例の行事として、下元節（陰曆十月十五日）における道君皇帝老子廟への朝礼を述べるものである。そして、それを「漏恒秩」（恒例）と述べる韋応物の回想から、少年韋応物自身もまた、「恒例」のように、玄宗の驪山宮行幸及び下元節の玄元室拝礼に扈從したであろうことが察せられる。

乃言聖祖奉丹經 乃ち聖祖に言して 丹經を奉げ

以年爲日億萬齡 年を以て日と爲す 億万齡

蒼生咸壽陰陽泰 蒼生は 咸く陰陽の泰らかなるを壽ぎ

高謝前王出塵外 高く前王の塵外に出づるを謝す

英豪共理天下晏 英豪は共に理まり 天下は晏し

戎夷讐伏兵無戰 戎夷は讐れ伏して 兵に戦うこと無し

時豐賦斂未告勞 時豊かにして 賦斂めて 未だ勞を告げず

海闊珍奇亦來獻 海闊く 珍奇亦た來り獻ぜらる

ここでは、前段に続いて、驪山宮において玄宗が「聖祖」道君皇帝老子に「丹經」を奉上し、億万年の彌栄を祈願する。果して、天下は太平にして幾年も戦乱が無く、民に納税の苦しみも無く、四海の珍品が続々と献上される。こうして、唐王朝は空前の繁栄を迎えるに至るのである。

干戈一起文武乖 干戈一たび起るや 文武乖き

歡娛已極人事變 歡娛已に極まりて 人事變ず

聖皇弓劍墜幽泉 聖皇の弓劍 幽泉に墜ち

古木蒼山閉宮殿 古木 蒼山 宮殿閉づ

續承鴻業聖明君

鴻業を續承したまふ聖明の君

威震六合驅妖氣

威は六合に震ひ 妖氣を驅う

太平遊幸今可待

太平の遊幸 今待つ可けんや

湯泉嵐嶺還氣氳

湯泉 嵐嶺に還お氣氳たり

ところが、絶頂は蓋し転落の子兆だったのであり、突如として「干戈一起」、即ち安祿山の乱が勃発して、太平の歡樂は一気に奈落の底へと転落する。その政変を経て、「聖皇の弓劍墜幽泉に墜ち」て玄宗は崩御し（但し實際に亡くなったのは七六二年）、古木蒼然たる驪山宮は、主の無いままひっそりと閉じられたままになった。

この部分の「聖皇弓劍墜幽泉」とは玄宗の死を意味するが、韋応物にはそれが必ずしも歴史的客観的な事実として意識されていないことについては、後にまとめて考えたい。

そして、皇帝の「鴻業」を繼承した「聖明君」即ち今上皇帝（代宗）は、天下に威靈を振って、妖氣をきれいに駆逐されたのである。あの玄宗の太平の御世の遊樂は今や望むべくもないが、ここ華清池には今も変りなく温泉の湯煙が濛濛と立ち上っている。

ここに引用した末段部分には、開元天宝の歡樂の絶頂から安祿山の乱による天下大乱への急転直下、その過程における玄宗の崩御、そして、依然として湯煙を上げる今日の華清池というように、僅か八句の短い段落中に、幾節もの政治情況が多層的に詠み込まれて、詩意の転換が頗る急である。

そして、この「驪山行」詩が詠みこまれた年代を推定するに当たって注目すべき表現は、引用部分の第五・六句「續承鴻業聖明君 威震六合驅妖氣」である。即ち、ここには天下の「鴻業」を繼承された今上皇帝への讃辞が述べられているからである。しかも、その詩表現の緊張の具合から見れば、この「驪山行」詩は、その今上皇帝の即位後間もなく詠まれたものの如く察せられる。

この今上皇帝とは、七六二年四月二十日に大唐の皇位を継承した代宗を指す。玄宗の皇位を継承したのは肅宗であるが、肅宗は七六二年四月十八日に崩御し、そして当の玄宗も、奇しくも同じ月、七六二年四月五日に崩御しているからである。

では、具体的に韋応物の「驪山行」詩が詠まれたのはいつごろであるのか。韋応物の年譜と照合しての詩作年代推定は、続く「温泉行」詩の制作年代推定とあわせ、後章においてあらためて考察することにする。

五

この章では、韋応物の「温泉行」詩について、その詩内容及び押韻等を参考しつつ、次の四小段に分けて検討することにする。

出身天寶今年幾

天寶に出身して 今年幾ぞいくばく

頑鈍如鎚命如紙

頑鈍なること鎚の如く 命は紙の如し

作官不了卻來歸

官と作り了ならず 却まはつて来り歸る

還是杜陵一男子

還た是れ 杜陵の一男子たり

この冒頭の一段は、韋応物が「温泉行」詩を詠むに至った情況について述べる。当時の韋応物の心理情況、そしてこの詩の制作年代を推定する上では甚だ重要な示唆を与える一段である。

即ち、韋応物は曾て天寶時代に宿衛として「出身」(任官)していたが、今や過酷な運命に翻弄されて、出世の望みかなわず、遂に悄然として故郷の「杜陵」(長安)に帰るところである。この冒頭の一段の表現から、この詩が「天寶」時代より可成り後年に詠まれたものであることがわかり、そして、韋応物が異郷での出世の夢も消え、無一物となって、長安へ帰郷する途中、驪山の華清池を通過して詠んだものであることが判明する。やがて、韋応物は意

気消沈したまま、北風の吹きすさぶ中、驪山温泉に投宿する。

北風惨惨投温泉 北風惨惨として 温泉に投ず

忽憶先皇遊幸年 忽と憶ふ 先皇 遊幸の年

身騎廐馬引天仗 身は廐馬に騎り 天仗を引く

直入華清列御前 直ちに華清に入り 御前に列す

玉林瑤雪滿寒山 玉林 瑤雪 寒山に満ち

上昇玄閣遊絳煙 玄閣に上れば 絳煙遊ぶ

平明羽衛朝萬國 平明 羽衛 万国朝し

車馬合沓溢四鄜 車馬合沓して 四鄜に溢る

蒙恩每浴華池水 恩を蒙りて 毎に華池の水に浴し

扈獵不蹂渭北田 獵に扈いて 渭北の田を蹂まず

朝廷無事共歡燕 朝廷 事無く 歡燕を共にし

美人絲管從九天 美人 絲管 九天従りす

ここは、北風吹きすさぶ華清温泉に投宿した韋応物が、何年も前と同様の情況の中で、「忽」と曾て玄宗の驪山宮行幸に扈蹕した経験を想起する場面である。

その年、「天仗」（近衛兵）を先導する役目の韋応物は、宮中の「廐馬」に乗り、近衛兵の特典としてそのまま華清宮に乗り入れて、玄宗の御前に整列したのであった。雪降り積む冬の驪山を、玄宗は朝玄閣まで登り、朝もやの中で道君皇帝老子に拝礼される。朝まだき離宮には諸国からの使者が朝貢に訪れ、その車馬が町に満ち溢れる。こうして朝廷は太平無事で歡樂を尽くし、妙なる音楽が天上より漏れ聞えてくる。

この一段は、華清宮における玄宗行幸の盛大なさまを描くが、その視点は、やはり前詩「驪山行」と同じく、一宿衛としての韋応物から見たものである。第三・四句「身騎廐馬引天仗 直入華清列御前」、第五・六句「玉林瑤雪滿寒山 上昇玄閣遊絳煙」等の表現に、それが如実に現われている。

一朝鑄鼎降龍馭

一朝 鼎を鑄て 龍馭降り

小臣髣絶不得去

小臣 髣絶え 去るを得ず

今來蕭瑟萬井空

今來いま 蕭瑟として 万井空し

唯見蒼山起煙霧

唯だ見る 蒼山に煙霧の起るを

「鼎を鑄て龍馭降り」とは玄宗の崩御を言う。⁽⁶⁾やがて安祿山の乱が勃発し、玄宗は崩御するに至るが、宿衛たる「小臣」の韋応物は玄宗と共に上天（殉職）することはせず、この世に生き残ったのであった。そして幾何かの歳月が流れ去り、現今の華清宮は見る影もなくさびれ果て、ただ驪山の山なみに変わりなく湯煙が上っているのが見えるだけである。

この一段は、去りし日の玄宗の崩御と、今日の華清宮の零落ぶりを描く。そして、曾ての貴族子弟の威勢とは裏腹に、今は衰落し糞れ果てた韋応物もその点景中の一である。

可憐蹭蹬失風波

憐れむ可し 蹭蹬として風波失し

仰天大叫無奈何

天を仰ぎて大いに叫ぶも 奈何ともする無し

弊裘羸馬凍欲死

弊裘 羸馬 凍こえて死せんと欲す

頼遇主人杯酒多

頼さいわいに 主人の杯酒の多きに遇ふ

この終章は、玄宗という最大の拠り所を失い、新たな就職もままならない浮浪者韋応物の「憐れな境遇を描く。冒頭の部分と呼応して、異郷での任官の夢も消え、尾花うち枯らして帰郷する韋応物の心理は、何とも哀れで無残

である。韋応物は破衣をはおり、やせ馬と共に嚴寒の驪山温泉に投宿し、宿の主人の杯酒を悉く頂戴するのであるが、曾ての少年時代の華やかな残影が重なるが故に、今の寥落ぶりが一層骨身に徹したものと思える。

ここにあげた「温泉行」詩の制作年を推定する場合、このように若年の韋応物が、異郷での任官がままならず、全くの無一物となつて、むざむざ故郷の長安に帰る途次、寒風の驪山温泉に投宿して詠んだものであるという情況設定が最大の關鍵となる。

六

以上、韋応物の「驪山行」「温泉行」詩について、そのあらましを見て来た。では次に、これらの詩が詠まれたのは具体的に一体何年のことであつただろうか。以下に、羅聯添「韋応物年譜」等の参考資料と引き合せながら、各詩の制作年代について考察してみたい。

まず「驪山行」詩においては、「干戈一起文武乖 歛戢已極人事變」という表現が安祿山乱の勃発を指し、続く「聖皇弓劍墜幽泉」という表現が玄宗の崩御を意味する。そして、次の「續承鴻業聖明君 威震六合驅妖氛」とは、七六二（宝応元年）四月二十日における代宗の即位を指すことになる。何故ならば、玄宗と次の肅宗は相次いで七六二年四月五日、十八日に崩御するのであり、帝位を継承したのは玄宗より三代目の代宗であるからである。従つてこの「驪山行」詩も、代宗即位後、間もなくの時期に詠まれたものと思われる。

今、羅聯添「韋応物年譜」を参照すると、玄宗崩御後、失職流落して、武功宝意寺に屏居して読書に励んでいた韋応物は、代宗の広徳元（七六三年）、洛陽丞となり、洛陽に赴いている。とすると、この「驪山行」詩もまた、その途次に長安東郊の驪山華清宮を通過して、韋応物が曾ての宿衛体験を憶い出して詠んだものではないだろうか。少なくとも情況証拠としては、この時に詠んだと考えるのが最も妥当であらう。

次に、「温泉行」詩は、韋応物が他郷での任官も思うにまかせず、竟に一切の希望を棄てて、長安に帰郷する途次、驪山温泉に投宿して詠んだ詩である。驪山温泉は長安の東郊の街道沿いにあり、そこを經由して長安へ帰るとなれば、韋応物の場合、その出發地は洛陽が最も適當である。これも羅氏の「韋応物年譜」によると、韋応物は、大暦元年春、洛陽丞を約四年で罷めた後、洛陽の同徳精舎に寓居する。その後、韋応物は無官のまま長安へ帰るようになるが、この「温泉行」詩は、そこに表現された零落ぶりから見ても、この帰郷の途次、驪山温泉に投宿した折に詠まれたものであろう。羅氏の「韋応物年譜」は、しかし、その長安帰郷の年代を特定せず、「今姑らく此に叙す」として、大暦二（七六七）年の冬の項に入れてゐる。また、傅瓊琮氏の「韋応物系年考証」⁽⁷⁾も大暦二、三、四年頃の事であるとしている。吉村氏の所論⁽⁸⁾において、

途中、驪山の下を通つた折の作が「温泉行」であると述べるのは蓋し正当であらう。

以上の考察から、韋応物の「驪山行」詩は七六三（代宗広徳元）年、二十七歳の彼が長安から洛陽へ向う折に、そして「温泉行」詩は七六七（代宗大暦二）年頃、三十一歳頃の彼が逆方向に洛陽から長安へ帰る折に、いずれも驪山温泉に投宿して詠懐したものであろうとの一応の推測を得るに至つた。

このうち、「驪山行」詩の制作年代推定については、管見の及ぶ限り、先人の明確な論及を見なかつたので、ここに改めて愚考を呈した次第である。

七

では最後に、ここに考察した「驪山行」「温泉行」詩を通して、そこに現れた韋応物の宿衛体験の意味するものについて概括し、更に、その特徴について文学史的な観点から把えてみたいと思う。

韋応物における若年の玄宗行幸の扈蹕経験、および続く安祿山の乱による失職と流浪の体験は、歴史的に見ても、天宝末期における盛唐の繁栄の絶頂と崩落、そして続く中唐への橋渡しの出来事として甚だ象徴的である。

韋応物の場合、玄宗の宿衛出仕が官蔭という功臣の父祖の「お蔭」によるものであったことがまず最大の特徴である。前述の如く、本人の実力の如何はともかくとして、何よりも家系身分等の既定の外的要因によって近衛としての出仕が認められ、雲上の特権を享受できるこの制度は、六朝時代以来色濃く続く門閥貴族・名族主義の伝統上に成り立つものである。もとより韋応物自身は、その制度の是非を云々する立場にないが、該当する本人として、その特例恩典に浴し、些かの不行跡を示しつつも、玄宗の驪山宮行幸に扈蹕して、その歓楽を享受したのであった。喩えてみれば、この当時の韋応物は、親（玄宗）のあたたかい庇護の中で何不自由なく遊び回る、まだ物心もつかない、やんちゃであどけない良家の「おぼっちゃん」であったと言えるか。

その韋応物にとって、七五五年、十九歳時に起きた安祿山の乱、及びそれに伴う大政変は、まことに青天の霹靂というも及ばず、破天荒の大地震であつただろうことが容易に察せられる。

やがて、「失職流落⁹⁾」した韋応物は、寺院に仮寓して読書に励むのであるが、これは実に、任侠に憧れ、得意な少年時代から、懐疑的省察の時代への転機¹⁰⁾

だったのであり、次の中唐の詩人としての韋応物を生み出す素地となる「雌伏の時代」であつたと言える。

こうして、後に中唐の詩人として知られる韋応物の詩人の出発が、盛唐の繁栄と没落に伴う享楽と辛酸にあつたことは、従来既に指摘されていることながら、あらためて関心を惹く興味深い事象である。

では次に、韋応物における如上の盛唐体験の特徴を、例えば同時代の杜甫詩と較べることによって見てみよう。

上述の「驪山行」「温泉行」詩からもわかる通り、韋応物はその若年に玄宗の行幸に従い、安祿山の乱による辛酸を嘗め尽くしたはずのものであるが、その詩文を見ると、意外なことに、玄宗や楊貴妃、更には安祿山（の乱）に

ついで客観的且つ適確に言及した表現が頗る少ないのである。

例えば、「驪山行」詩においては、全四十句中、安祿山の乱、及び玄宗の崩御に特に言及する部分は、

干戈一起文武乖 干戈一たび起るや 文武乖そむく

聖皇弓劍墜幽泉 聖皇の弓劍 幽泉に墜つ

の二句だけである。韋応物はここで、それら自分の生命にも関わったはずの重大事件について、わずか二句の中に、まるで一般の他人事のようにあっさりと言及して片付けて述べ終る。また、全二十四句から成る「温泉行」詩においても、同じく玄宗の崩御に言及して、

一朝鑄鼎降龍馭 一朝 鼎を鑄て 龍馭降り

小臣髯絶不得去 小臣 髯絶え 去るを得ず

のように、故事を踏まえたわずか二句の比喩の中に実に淡々と述べ去るだけである。これらの詩の表現において、仮に追憶による韋応物の記憶の消失、美化の部分を勘案するにしても、これでは侍衛として出仕した己が主君たる玄宗への言及が少しく淡白すぎはしないか。或いは韋応物は、過去の忌まわしい記憶として、意図的にそれらの記述を避けたのか。

このことについては、韋応物が宿衛として明らかに玄宗側の人間であり、「状況的にも感性的にも、玄宗と同じ世界を共有」⁽¹⁾しており、玄宗及び盛唐について、まだ客観的な存在として突き放して把えることができなかったことが最大の要因として挙げられるであろう。先の「おぼっちゃん」の喩えを再び借りるならば、自分の最大の庇護者である玄宗を突如襲った安祿山の乱という不幸に対して、まだ物心の十分につかない韋応物少年は、その意味するものについて客観的に判断することもできず、ただ自分の歓楽の世界が消失したという事実のみをはかなくも認識したのである。

一方、韋応物と同時代のやや年長であった杜甫は、その点、玄宗や楊貴妃、安祿山に対して客観的且つ批判的に言及した詩が、量的にも質的にも豊富である。

天宝十四載（七五五年）十一月、丁度十九歳の韋応物が玄宗に扈從して驪山宮に宿衛していたと覚しき頃、時と所とを同じくして、右衛率府胄曹參軍たる廉職に任じた四十四歳の杜甫は、奉先県にいる妻子に再会すべく、驪山を經由して長安の北東方に赴く。その途次の見聞を記した詩が、「京自り奉先県に赴く詠懷五百字」詩である。その題下の注記「天宝十四載十一月初作」からもわかる通り、あたかもこの時、更なる北東方では安祿山軍が既に鋒起し、破竹の勢いで一路洛陽長安へ向けて南下し始めている。ここに一百句五百字の全詩を引用する紙幅の余裕は無いが、韋応物の「驪山行」「温泉行」詩との比較上、その驪山宮の描写に関する部分のみを挙げれば次の通りである。

凌晨過驪山

あかつき 凌晨に驪山を過ぐれば

御榻在嵒嶠

御榻は嵒嶠に在り

蚩尤塞寒空

蚩尤 寒空を塞ぎ

蹴踏崖谷滑

蹴踏して 崖谷滑らかなり

瑤池氣鬱律

瑤池は 氣鬱律として

羽林相摩憂

羽林 相摩憂す

君臣留懽娛

君臣 留まりて懽娛し

樂動殷膠嶠

しよも 樂動して 膠嶠に殷く ひび

賜浴皆長纓

浴を賜ふは 皆長纓にして

與宴非短褐

宴あそに与かるは 短褐に非ず

韋応物の「驪山行」「温泉行」詩について（竹村）

彤廷所分帛

彤廷 分つ所の帛は

本自寒女出

本と 寒女より出づ

鞭撻其夫家

其の夫家を鞭撻し

聚斂貢城闕

聚斂して 城闕に貢がしむるなり

聖人筐篚恩

聖人 筐篚の恩

實欲邦國活

実に邦國の活きんことを欲す

臣如忽至理

臣 如し至理を忽せにせば

君豈棄此物

君 豈に此の物を棄てんや

多士盈朝廷

多士 朝廷に盈つ

仁者宜戰慄

仁者 宜しく戰慄すべし

況聞內金盤

況んや聞く 内の金盤は

盡在衛霍室

尽く衛・霍の室に在りと

中堂舞神仙

中堂に神仙舞ひ

煙霧散玉質

煙霧 玉質に散ず

煖客貂鼠裘

煖客 貂鼠の裘

悲管逐清瑟

悲管 清瑟を逐ふ

勸客馳蹄羹

客に勧むるは 馳蹄の羹

霜橙壓香橘

霜橙 香橘を圧す

朱門酒肉臭

朱門 酒肉臭く

路有凍死骨

路には凍死の骨有り

榮枯咫尺異

榮枯 咫尺に異なる

惆悵難再述

惆悵して 再び述べ難し

これは、先の韋応物の「驪山行」「温泉行」詩のどこかでおおらかな表現に比べると、又何と厳しく激しい玄宗糾弾の詩筆であろう。天宝十四載の十一月、時間的にも空間的にも同時に同一の驪山に在ったと思われる韋応物と杜甫の驪山宮描写の違いは、二人のその時の年齢（韋応物十九歳、杜甫四十四歳）やその時の立場、本来の資質や詩人としての意識などを考え合せないと安易な比較はできない。しかしながら、このような本質的な違いが生じる最大の原因は、杜甫は、下級官吏であつても、玄宗をとりまく朝官の圏外にあつて、ひたすら在野人として社会の現実に直面して辛苦を嘗めていたのに対し、韋応物は、功臣の子弟として官蔭によつて玄宗の朝官となり、身分的にも意識的にも玄宗と一体化していたことであろう。あたかも引用詩例中において、華清池への入浴について、韋応物の「温泉行」詩が、

恩を蒙りて毎に華池の水に浴し

というように主として天恩を述べるのに対し、杜甫の「自京赴奉先県詠懷五百字」詩は、

浴を賜ふは皆長纓（高官）

というように専ら批判的に述べている。これは、朝廷と一体のものとしてあつた韋応物と、逆にそこからは疎外されていた杜甫の事物を見る眼の本質的な違いを、たくまらずして見事に浮き彫りにした詩表現である。

不識廬山真面目

廬山の真面目を識らざるは

只緣身在此山中

只だ身の此の山中に在るに縁る

という。いまこの喩えを借りるならば、韋応物は自ら廬山山中（玄宗の朝廷）に在って、却つてその「真面目」が

韋応物の「驪山行」「温泉行」詩について（竹村）

見えなかつたのに対し、杜甫は、その時代に生きながら、埽外の詩人としての辛酸を嘗めつくし、却つて廬山の眞貌を認識し得た詩人であると言える。後世杜詩を詩史として評価する所以であろう。

そして、その韋忠物が、やがて

近歳の韋蘇州の歌行の如きは、才麗の外、頗る興諷に近し。其の五言詩は、又高雅閑澹にして、自ら一家の体を成す。

(白居易「元九に与ふる書」)

のような、いわば廬山の眞影を描き得た詩人として高い評価を得るに至るには、安祿山の乱後の転遷を最初の辛酸として、まだまだ幾度も出仕と屏居の変遷を繰り返さなければならなかつたのである。

(一九八八年八月、長江湖上の船上にて起稿。同十月、福岡にて脱稿)

註

- (1) 羅聯添『唐代詩文六家年譜』(学海出版社、一九八六年)所収。
- (2) 前掲羅氏「韋忠物年譜」に、『文献通考』卷一五五の記述を引いて例証する。
- (3) 愛宕元「唐代における官蔭入仕について―衛官コースを中心として―」(『東洋史研究』第三十五卷第二号、京都大学東洋史研究会、昭和五十一年)。
- (4) 無為にして天下が良く治まること。『周易』繫辭下伝に、「黄帝堯舜、衣裳を垂れて天下治まる」と。
- (5) 玄宗の驪山宮行幸は、新旧の『唐書』および『資治通鑑』等に公式記録されている。韋忠物が扈從したと思われる天宝十載(十四載の間は、玄宗は毎年冬十月になると必ず驪山宮に赴いている。張自修『驪山古迹名勝志』(陝西省臨潼県旅游局、一九八四年劉群效序)、および拙論「長生殿における季節の推移」(徳島大学教養部紀要、第十九卷、一九八四年)参照。

- (6) 『史記』卷十二「孝武本紀」(また卷二十八「封禪書」)に、「黄帝首山の銅を采り、鼎を荆山の下に鑄る。鼎既に成るや、龍胡頰を垂れ、下りて黄帝を迎ふる有り。黄帝上りて騎り、群臣後宮、上の龍に従ふもの七十餘人、龍乃ち上り去る。餘小臣上るを得ず、乃ち悉く龍頰を持ってば、龍頰抜け、黄帝の弓を墮す」とある。
- (7) 傅璇琮「韋応物系年考証」(『唐代詩人叢考』一九八〇年、中華書局)二八六、二八九頁。
- (8) 吉村弘道「韋応物の生涯(上・下)」(『学林』七・八号、中国芸文研究会、昭和六十一年)。
- (9) 宋・沈作喆の「補韋刺史伝」に、「漁陽の兵乱の後、流落して失職するに泊たよび、乃ち更めて節を折り読書す」とある。
- (10) 赤井益久「韋応物と白楽天―諷諭詩を中心として」(国学院大学『国学院雑誌』八一―五、昭和五五年)。
- (11) 深沢一幸「韋応物の歌行」(京都大学『中国文学報』第二四冊、一九七四年)。
- (12) 蘇東坡「西林の壁に題す」(『蘇軾詩集』卷三三、中華書局、一九八二年)。